

第2次世界大戦後の日本における アザラシ産業

宇仁義和

1 はじめに

アザラシは食肉目鰭脚亜目アザラシ科に属する動物の総称で、地球上には19種(シエファソンほか1999、Rice 1998)、日本近海にはオホーツク海を中心に、アゴヒゲアザラシ (*Erigonothus barbatus*)、ゼニガタアザラシ (*Phoca vitulina*)、ゴマフアザラシ (*Phoca largha*)、ワモンアザラシ (*Phoca hispida*)、クラカケアザラシ (*Histiophoca fasciata*) の5種が分布・回遊する(日本哺乳類学会1997、学名はRice 1998に従った)。このうちゼニガタアザラシは、襟裳岬や釧路から根室沿岸の岩礁でも繁殖し、国内で周年観察される唯一の種である。北海道では数百頭にまで減少し、地域的な絶滅が心配されるが、調査研究が進展し、保護管理のための基礎データが整った唯一の鰭脚類でもある(和田ほか1986)。残り4種は海氷上で出産し、新生児は白い産毛で生まれ、氷上で授乳期を過ごす(King 1983)。氷上出産種が日本沿岸で見られるのは、通常、

流水がやってくる場所と期間に限られる。

日本国内の近代におけるアザラシの利用は、分布域に近い北海道の東部を中心に行われてきた。明治時代前半のオホーツク海側の斜里や枝幸では、年間100頭を超えるアザラシ皮の産出があった(宇仁2001)。入殖者の自家消費も行われたと推測されるが、同時代の具体的な記録は得られていない。自家消費はその後も続けられ、とりわけ第2次大戦中や戦後間も多くの物資不足時は、オホーツク海側の地域では個人レベルの捕獲が再興、毛皮を販売し、油脂を食料油や馬具の凍結防止剤として利用することが1950年代まで行われた(宇仁2005)。

アザラシの大規模な捕獲と産業的な利用は戦時中に始められた。脂肪が油脂工業の重要原料とされたほか、毛皮の皮革製品への加工、肉は食用、内臓は製薬用に用いられた(犬飼1942)。このような利用は戦後も継続して行なわれ、1949年には網走を中心に41隻の猟船が春のオホーツク海

キーワード
海獣、アザラシ、毛皮、みやげ品、オホーツク海、北海道

Summary | Originating as a chartered company established during World War II, the true seal industry continued to exist in Japan until the 1980s. True seals were first caught in the Sea of Okhotsk, made into fur products on Japan's main island, Honshu, and sold as souvenirs in Hokkaido. Later, the fur products were sold by the company in Hokkaido. The catch was estimated at 10,000 animals in 1976, and the market demand reached its peak at 5,000 largha seals during the period from the late 1970s to the middle of the 1980s. After the establishment of a 200-nautical mile exclusive economic zone by the Soviet Union in 1977, the fur processors used imported seal skins before finally ending production in the early 1990s. The true seal populations have been exploited by commercial hunters from both Japan and Russia, and continue to be influenced by incidental catches and a variety of other factors. The two countries are responsible for the maintenance of this ecosystem and have been establishing a system for the management of true seals.

Keywords | marine mammal, seal, fur, souvenir, Okhotsk Sea, Hokkaido



写真1 1940年代～1950年代前半頃のアザラシの陸揚げ
ゴマフアザラシのほか、クラカケアザラシも多数確認できる。
撮影地は北海道のオホーツク沿岸と推測されるが不明。
(斜里町立知床博物館蔵)

で操業、推定6000頭以上を捕獲し、肉は食用、脂肪は石けん、脚ひれはゼラチンに加工された(Wilke 1954、写真1)。

その後、アザラシ皮の需要はスキーシー
ル(スキーの滑走面に取り付け、雪面を歩行するための補助具)などに限定されたが(合川1961)、1960年中頃からは観光みやげ品の材料を得るためのアザラシ猟業が始められた。当初は「一部の漁業者が主として、流水の張りつめる閑漁期に副業的に操業」していた「非常に小規模で、零細」であったが(内藤1971)、観光みやげ品として製品が市場に受け入れられ(宇仁2005)、毛皮製品の製造、販売までを含む「アザラシ産業」へと成長した(吉田

1977)。当時の日本語ではアザラシの和名も一定しない状況であったため、毛皮業者の間では樺太先住民のウイльта語を起源とする種と年齢、換毛状態に応じた呼称が用いられた(寺田1997)。

以上がこれまでに明らかにされてきたアザラシ産業の概要である。本論では、具体的な資料と聞き取りから、アザラシ毛皮製品の誕生と製造販売の変遷、毛皮の輸入について述べ、捕獲数についても考察した。近年、本格的な毛皮の歴史書が刊行されるようになったが、日本に関する記述は戦前あるいは近代初期で終わっている(西村2003、下山2005)。わずか数十年前に存在した最後の毛皮産業の形成と展開を見渡し、アザラシに関する日本の責任を考えたい。

他方、毛皮製品の製造や販売については、アザラシを立項した統計書は調べた範囲では得られなかった。そこで、統計書に代わる資料として、北海道観光物産興社発行の商品カタログ「北海道のおみやげ」(北海道観光物産興社1966-1985)を用いた。加えて、関係者からの聞き取り調査を実施した。

聞き取りは1998～99年、2002年、2005～07年に実施、日魯毛皮(現・ニチロ毛皮)の関係者を中心に毛皮産業の関係者などから行なった。対象者は以下のとおりである(順不同、職名は在職時の代表的なもの)。日本海獣(株)事務員、新日本海獣(株)社長、日魯漁業(株)網走ミシク飼育場長、日魯毛皮(株)札幌営業所長、同営業所営業担当者、同営業所事務員、日魯毛皮商事部長、同社草加工場製担当者、同工場製造担当者、(株)遠軽毛皮社長、同社専務取締役、同社専務取締役、浪田海獣漁業部社主、木下商事(株)社長、北海道観光土産品協会常務理事、北海道観光物産興社社長、優良道産品推奨協議会専務理事、北海道経済部マーケティング支援グループ主査。なお、聞き取り内容の記述にあたっては、実物資料や文献での裏付けが得られなかった内容は伝聞型で表現した。

1977)。当時の日本語ではアザラシの和名も一定しない状況であったため、毛皮業者の間では樺太先住民のウイльта語を起源とする種と年齢、換毛状態に応じた呼称が用いられた(寺田1997)。

本研究に使用した資料は、新聞記事、雑誌、私文書、手紙、実物資料などである。具体的には、紋別市立図書館所蔵の地方紙(紋別新聞、北海民友新聞)およびブロック紙(地方版(北海道新聞、北海タイムス)、網走市立図書館所蔵の地方紙スクラップ(網走新聞)、北海道観光物産興社商品カタログ「北海道のおみやげ」、遠軽毛皮商品カタログ、同社営業経歴書、日魯毛皮アザラシ輸入関連書類、日本海獣税務関係書類、浪田一幸氏出演テレビ番組収録ビデオなどである。統計書については、捕獲状況を知るために「漁業養殖業生産統計年報」を利用した。

なお、本論では「アザラシ」はアザラシ

科の動物の総称、「アザラシ産業」はアザラシの捕獲や利用に関連した企業活動を指す。また「海獣」は、鯨類以外の海生哺乳類を指す用語として用いた。

2 捕獲方法と操業海域

捕獲方法

アザラシの捕獲は、磯舟（船外機船）で出猟可能な沿岸部や汽水湖での捕獲（以下、沿岸捕獲）と漁船に磯舟を積み込んで沖合で行われる捕獲（以下、沖合捕獲）とに分けられる。いずれもライフル銃を用いた銃猟であった。

沖合捕獲での捕獲方法は、古くは戸川が写真を用いて紹介している（1961、1966）。戸川（1961）によると、捕獲は母船（本船）に2艘の子船（磯舟）で行い、乗組員は親方に機関長、射手2名、輦取1名、コック兼腹裂の計6名で、船は白く塗装し、乗組員も白い狩衣に白い帽子といういでたちであった。一航海は3〜4月だと1週間から10日間くらいで、5月に入ると流水を追って樺太近海まで出猟し、半月から1月の航海という。沖合捕獲は船舶を使用するが、1隻での操業ではなく、木造船時代から本船に磯舟を積み込んでおき、捕獲海域では磯舟に乗り換える形で操業していた（写真2）。

1970年頃では、銃器は、30.06口径のライフル銃を用い、風下から接近し、50〜100mの距離で捕殺、航海日数は2〜13日程度という。1日の操業は6〜19時頃までで、アザラシが氷上に上がる10〜16時頃の間に活発に捕獲が行われた（内藤1971）。これは鋼船導入後の1970年代後半についても変わらず、ライフル銃は口径30.00、30.06、30.08を用いること、捕獲量の差は接近技術にあると指摘している（吉田1977）。木造船は閑漁期に転用したもので、はえ縄船のほか（菊地1973）、釣り船も用いられた（聞き取りによる）。はえ縄船も釣り船も甲板後部は漁具などの設備がなく、磯舟を収容できるスペースがあり、アザラシ猟に転用可能であったと考えられる。

操業海域

1970年頃の沿岸捕獲は、知床半島と国後島にはさまれた根室海峡で2月中旬から4月下旬、根室半島から厚岸にかけての太平洋沿岸ではゼニガタアザラシを対象に5月中旬から6月中旬、そしてサロマ湖や尾岱沼、風蓮湖で夏や秋に操業していた（内藤1971）。この操業形態は1970年代広範も基本的に同じであった（吉田1977）。このうち、釧路から根室にかけての太平洋沿岸は、ゼニガタアザラシを対

象とした捕獲であり、繁殖場のなかには過度の狩猟が原因となって消滅したものもあると考えられている（伊藤・宿野部1986）。

一方、沖合捕獲はアザラシ専用鋼船が導入された1971年を境に操業海域が大きく異なる（図4）。1970年までの木造船時代の操業海域は、3〜4月の紋別から網走沖合から樺太南沖合といった（宇仁2000、日本冷蔵函館支社1948から作成）、北見大和堆を中心とするオホーツク海域であった（内藤1971）。一方、1971年の鋼船導入後は操業海域がサハリン東方沖に広がり、操業時期も4〜7月上旬となった（吉田1977）。アザラシ専用鋼船とは96トン型で、後述の北日本海獣（株）第2松田丸と渋田海獣漁業部（以下、渋田海獣）の第35晴昇丸である（写真3）。両船とも完成年の記録文書は見つけられなかったが、新聞報道では1971年春から現れる（北海民友1971年3月9日）。鋼船による具体的な捕獲場所については、第35晴昇丸に乗船して生物学的調査を実施した Naito and Konno (1979)、それに伴走した網走船籍の漁船に同乗した Kato (1982) に、1975年5月1日から6月4日までの樺太東岸での操業地点が記録されている。渋田海獣の社主・渋田一幸氏は生前、オホーツク海最北部のギシガ湾まで航海した

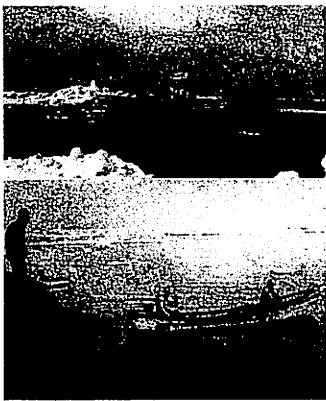


写真2 1960年代の木造漁船を用いたアザラシ猟の母船(上)と船尾に曳航されていた磯舟(下)母船のブリッジ上部には見張り台が取り付けられている
1966年4月網走市能取岬沖(個人蔵)

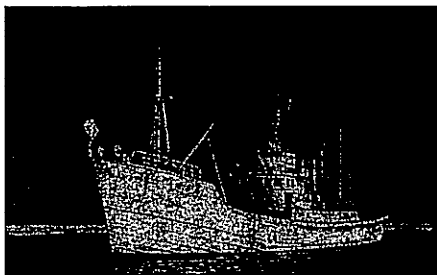


写真3 1971年からオホーツク海の公海での沖合捕獲の中心となった紋別市の浜田海獣所所属の「第35晴昂丸」(個人蔵)

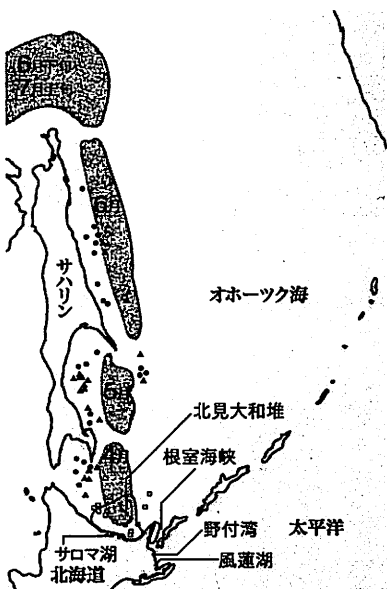


図1 木造船時代(1940-1970年)と網船時代(1971-1976年)によるオホーツク海のアザラシ沖合捕獲の操業範囲
白抜きで示されたのが木造船時代の操業海域
□宇仁2000(日本冷蔵函館支社1948より作図)、
実線は内藤1971による、
黒または灰色で示されたのが網船時代の操業海域
● Kato 1982、▲ Naito and Konno 1982、
網掛けは吉田1977(沖合捕獲のみ図示)による

と語っている。実際の操業範囲はより北方にもあった可能性がある。操業海域がサハリン東方沖以北にまで広げられたのは、品質の良い換毛後の毛皮、すなわち傷や脱毛が少なく青みがかかった美しい毛皮が得られる6月に操業できるためという。

捕獲時の処理

なお、第35晴昂丸は1977年のソビエト連邦の200海里排他的経済水域導入によって操業不能に追い込まれ(北海道テレビ放送1977「200カイリの彼方に」)、その後、北洋減船の対象となった(新北海道漁業史編さん委員会2001)。

捕獲されたアザラシの入荷時の状態はさまざまであった。遠軽毛皮からの間き取りでは、沿岸ハンターによる捕獲個体は、解体技術の問題から解体しない丸のままの状態

3 アザラシ毛皮産業の形成と展開

まの状態で集荷したといい、沖合捕獲の場合、航海日数が1週間以上になるため船上で腹を割いて内臓を捨て代わりに氷を詰めて保管したという。新聞記事の写真では、沖合捕獲の個体でも丸のままの場合と(北海民友新聞1978年4月28日)、腹を割いて内臓を取り出した状態での陸揚げしたもの(紋別新聞1970年6月30日、北海民友新聞1975年5月23日、同1976年4月3日)、毛皮だけのもの(北海民友新聞1969年5月21日)、これら3種類が確認できた。

アザラシの毛皮動物としての位置付けは、衣類になる主力商材ではなく、ほとんどの用途はブーツの縁どり、あるいはバッグなどの袋物に使われる特殊な材料であり、経

新日本海獣による製造開始

済的な重要度は小さいものであった。明治時代前期の北海道を除き、公式統計にアザラシやその製品が独立の項目として現れることはなく、毛皮業界の業界紙である(社)日本毛皮協会(1994年以降は(社)日本毛皮協会)が発行していた「毛皮新報」でさえアザラシを取り上げることが皆無に近かった。例えば「日本毛皮協会50年史」(日本毛皮協会50年史編纂委員会2001)の文中に現れる海獣はオットセイとラッコのみで、アザラシの文字は一度も使われていない。特殊で小規模な毛皮産業の形成と展開の過程は次のようなものであった。

毛皮(以下、日魯毛皮)と遠軽毛皮(以下、遠軽毛皮)の2社として間違いないようである。

日魯毛皮は水産大手の日魯漁業(現在は、マルハニチロホールディングスのもとで分社化)の子会社で、1959年設立の新日本海獣(以下、新日本海獣)が、1962年に名称変更したものである。その後、1981年にニチロ毛皮と再度の名称を変えている(同社ウェブサイト <http://www.nichirofur.co.jp/html/kaisha-gaiyo.html> 2009年3月11日)。新日本海獣の前身は、戦時中の1942年(昭和17)に設立された日本海獣(以下、日本海獣)である。日本海獣の事業目的は1941年の盟約保護条約失効後のオットセイの海上捕獲と鞣製、農林省直轄であった中部千島開発事業の実施であった(日本海洋漁業協議会1995)。そのため、戦後は事業の多くが不可能となり資産状況が悪化したため、「当局のすすめにより」同社は1959年に解散、新会社を設立、資産と同社が目的としていたオットセイ毛皮の鞣製事業は新会社の新日本海獣が継承することになった(日本海獣税務関係書類)。書類には「当局」に関して具体的な記述はないが、当時の農林省水産局のことと考えられる。日本海獣が所有していた埼玉県草加市のなめし工場(草加工場)は

新日本海獣の唯一の製造拠点となり、日魯毛皮に名称変更してからも草加工場は主要な生産拠点であり続け、毛皮のなめしとアザラシ毛皮製品の製造が続けられた。

では、なぜ同社がアザラシ毛皮製の観光みやげ品を製造することになったのか。聞き取りによれば、オットセイ毛皮が海上捕獲の規制(川上1972)などで思うように集まらず、会社存続のためには何らかの商品製造を行う必要に迫られ、結果的に原料が確保可能であったアザラシを用いた商品開発が始まったのだという。原料アザラシの確保方法については関係文書の入手や当時の担当者であった草加工場長の聞き取りがかなわず、決定的な情報が得られなかった。状況証拠としては、1950年頃までアザラシ陸揚げの中心であった網走には、戦時中から日本海獣の出張所が置かれており、戦後もアザラシ猟を操業していたこと(網走市立図書館蔵新聞切抜帳1948年5月8日)、日魯漁業は1943年3月に網走事業所を設立、戦後も水産物の加工を行っていたことから(網走市・網走商工会議所1958)、1950年代でも網走を拠点に原料アザラシの調達は容易であったようである。

1950年代後半から操業していた網走船籍のアザラシ猟船の乗組員からの聞き取

りによると、アザラシの陸揚げは、網走港にあった日魯漁業の工場に横付けして行なったという。工場での加工内容は不明だが、同社の事業内容から油脂確保が目的であったと考えられ、この副産物として毛皮を利用したのかもしれない。

新日本海獣では、アザラシ製品の製造について、なめしは自社の埼玉県の草加工場で行うが、以降の加工作業は外注することが多く、袋物の金具取り付けなど特殊な作業であるので専門業者に委託していた。自社で製造していたのは、「トツカリ」という商品名で売り出されたアザラシ人形くらいだったという。日魯毛皮の職工からの聞き取りによると、このアザラシ人形は、1962〜63年頃に海外で購入して持ち帰られた同様の外国製品を真似て作られたものという。独自の工夫は加えられ、参考にした外国製品は芯が文鎮のような鋳物でできており非常に重いものだったが、同社では、ぬいぐるみの中におがくずを詰め、芯に針金を使用した。この方式だと軽くでき、製造工程で形もある程度自由に変えられる。当時から用いられているミョウバンなめしの製法では、水分を含むと皮は伸び、乾燥すると縮む性質がある。アザラシ人形の中におがくずを詰めるときはたくさん入るように水で湿らせて詰めると皮も



写真4 新日本海獣と日魯漁業が製造した最初期のアザラシ毛皮製品

上段左の婦人用帽子の内側には新日本海獣のタグ(左下)が付いている(個人蔵)

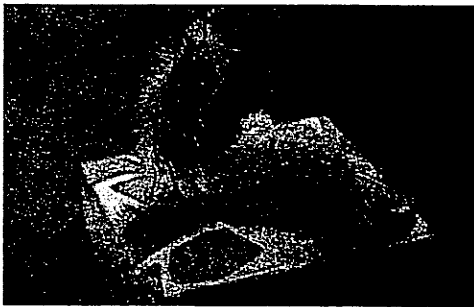


写真5 遠軽毛皮が「ミニアザラシ」という商品名で販売していたアザラシ人形(個人蔵)

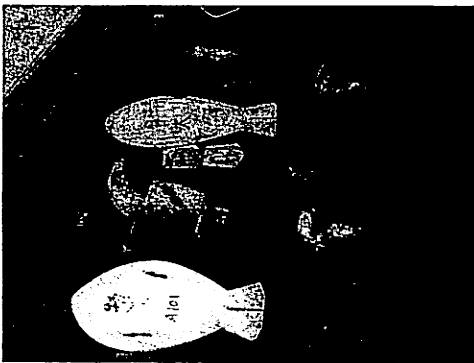


写真6 遠軽毛皮の注文で製作されたアザラシ人形用毛皮打ち抜き具
製品はタテゴトアザラシ製(斜里町立知床博物館蔵)

業者が引き取るようになったという。しかし、遠軽毛皮社長によれば、加工技術が伴わずに売れ残り、製品の大半は遠軽毛皮が引き取るようになったという。

なお、原料のアザラシは紋別市の渋田海獣、製造は遠軽毛皮の寡占状態であった。1975年、紋別市に北日本海獣漁業(松田政躬社長)が設立されアザラシ原皮製作を開始、4月から2航海で1850頭を捕獲、東京や兵庫県の工場へ送り婦人用コートやハンドバッグに加工、今までに700〜800枚の原皮を東京方面へ出荷するというアザラシ毛皮業界への新規参入者が現れた(北海道新聞1975年6月4日)。

業者に依頼していた。依頼先は財布とハンドバッグ、ベルト、草履と品物によって全部異なっていたという。遠軽毛皮の名前で販売されていたアザラシ製品の多くは、同社の製造というより、同社のブランドで販売される商品であった。一方、「ミニアザラシ」と名付けられたアザラシ人形(写真5)は自社製造で、原反からの打ち抜き作業は自社工場内で、縫製は近くの主婦などのパートまたは内職とされていた(北海道新聞1972年1月28日夕刊)。毛皮の裁断は通常は専用の包丁が用いられるが、遠軽毛皮では作業効率向上のため東京の刃物業者に発注した木槌で叩く打ち抜き用の専門刃物を使用していた(写真6)。

製造拠点が北海道へ、遠軽毛皮による製造

伸び、完成のために乾燥させると皮が縮み、ぬいぐるみの形が固定されるという利点があったらしい。

なお、1960年代前半の最初期の製造と伝えられるアザラシ毛皮製品の試作品が現存する(写真4)。

その後、日魯毛皮は日本国内での毛皮市場の拡大によって、ミンク毛皮のガーマン

ト(コートなどの上衣類)の製造部門が繁忙となり、作業量に比較して利益の小さい観光みやげ品の製造をとりやめ、1969年に北海道遠軽町の遠軽毛皮工業所に型紙や製造の系列関係を含めて譲渡した。アザラシ毛皮製品の製造を譲渡された遠軽毛皮は、遠軽毛皮革工業所として1953年に創業、1965年にアザラシの観光みや

げ品の製造販売を開始、1975年に株式会社となった(同社「営業経歴書」)。当初は、染色した親牛のなめし皮を仕入れてジャンパーやコート、つなぎを縫製して販売していたが、このような仕事は1963〜65年頃にとりやめ、代わってアザラシを仕入れて塩蔵し、原皮あるいはなめし皮として販売し始めたという。

そして1970年からは前述のとおり、日魯毛皮から譲渡されたアザラシ毛皮製

の北海道の観光みやげ品の製造を開始した(北海道新聞1970年11月12日)。製造工程のなかには外注作業も多く、同社が直接行なったのは、原反(1頭分まること)のなめし皮からの裁断・抜き打ち、各工程の検品であった。一方、なめしは函館の職人に外注、縫製や金具の取り付けは東京や京都の

なお、現在もアザラシ毛皮製品が北海道みやげとして販売されているが、遠軽毛皮とは別のブランドである。

職工調達と技術伝承

アザラシ毛皮製品を商品化した新日本海獣は新設された会社であり、前身の日本海獣は休眠状態であったため、創業時には必要な技術職員や職人を欠いており、なめし工や製造工を雇用する必要があった。聞き取りによると、これらの職工は特殊な技術職であったので、採用方法は新卒者の採用ではなく、親会社の日魯毛皮が北洋漁業の拠点としていた函館市やその近郊の毛皮関係業者の職工を縁故者を通して迎え入れる方法が採られたという。函館市に隣接した七飯町(現・北斗市)のJ.R大沼公園駅周辺には毛皮業者が多く、人材供給の中心は同地にあった鍋谷毛皮であった。同社は戦前から北日本最大の毛皮会社と知られ、1954年の(社)日本原毛皮協会の業者名簿でも会費年額が最上位の「貿易部」に等級付けされている(日本原毛皮協会a.d.)。

聞き取りによると、新日本海獣の社長は小樽出身、聞き取り対象者のうち、なめし職工の2人は鍋谷毛皮、日魯毛皮の幹部社員4名のうち1名も鍋谷毛皮出身者であった。

4 アザラシ毛皮製品の商品構成と販売

観光みやげ品カタログによるアザラシ製品の推移

「北海道のおみやげ」の掲載商品数を使い、アザラシ毛皮製品の販売動向を調べた。同社は、1960年に発足した北海道の観光みやげ品の唯一の卸売り商社であり(北海道観光物産興社1991)、商品構成は観光みやげ品の販売傾向を知るには最適と考えた。同社によると商品カタログの発行頻度は、当初は隔年で、途中から毎年となり、1985年あたりで終刊となったという。入手できたカタログは、1957年版(タイトルの年号、奥付はなく発行年は不明、以下「版」を省略)、1960年、1962年、1964年、1966年、1968、85年である。アザラシ製品の初出は1966年で、以降最終号の1985年まで毎年掲載されている。製造元の記載は、1969年までは日魯毛皮、1970年以降は遠軽毛皮で、日魯毛皮名義でのアザラシ毛皮製品のカタログ掲載は4年間であった。日魯毛皮が製造した商品数は少なく、1966年に8点、1968年9点、1969年でも13点であった。

遠軽毛皮が製造者となってからのカタログ掲載アザラシ製品数は、1970年

の13点から始まり、翌1971年は26点、1972年45点、1973年52点と増え続け、1970年代は74、82点、1980年代に100点を超えた(図2)。同社のアザラシ製品の商品構成は、ぬいぐるみ・キーホルダー、財布・がまぐち、ハンドバッグやセカンドバッグなどバッグ類、名刺入れやベルトなど洋品類、はきものの五つに大別される。商品構成は1972年に完成したとみることができ、以降1985年までの商品の構成比は、財布・がまぐちが約4割、バッグ類が約3割と多くを占めていた。遠軽毛皮の自社カタログでは、1974年以前に発行された遠軽毛皮革工業所名義の「アザラシ製品総合カタログ」には合計79点、オホーツク海での捕獲の最盛期にあたる「77アザラシ製品総合カタログ」では、価格入りで146点が掲載されている(写真7)。郵便番号が7桁であることから1998年以降に発行されたと判断できる「アザラシ製品総合カタログ」では、65点の掲載である。このカタログも価格入りで、ハンドバッグが3万5千、4万9千円、セカンドバッグでも2万1千、2万7千円、財布やがまぐちが2700、1万5千円、アザラシ人形は、小(8×5cm)1000円、中(12×8cm)1600円、大(15×10cm)2400円、特中(22×14cm)8千円、特大

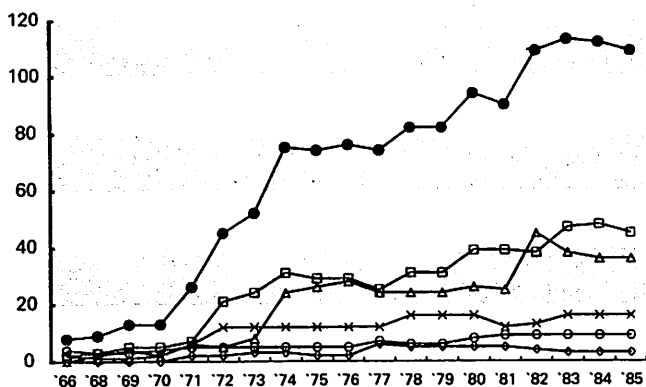


図2 北海道観光物産興社商品カタログ「北海道のおみやげ」掲載のアザラシ毛皮製品点数1966-1985年
 1966-1969年は日魯毛皮、1970-1985年は遠軽毛皮の製造。
 ◇はきもの、×洋品(名刺入れ・ベルト・靴べら等)、
 △バッグ類、□財布・がま口、○アザラシ人形・キーホルダ、●総数。
 (北海道観光物産興社商品カタログ「北海道のおみやげ」より作成)

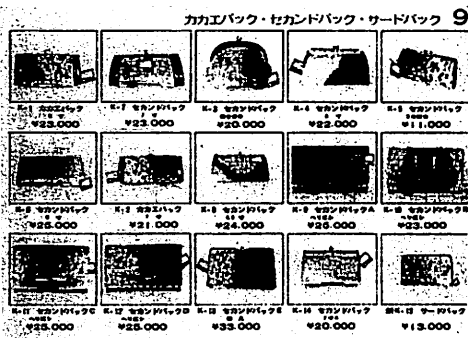


写真7
 遠軽毛皮発行の「77年アザラシ製品総合カタログ」
 斑点はゴマフアザラシ製、
 白黒2色がオスのクラカケアザラシ製、
 全体に灰色はメスのクラカケアザラシ製
 (個人蔵)

(30×18cm) 1万5千円となっていた。以上から、商品数を見る限り、アザラシ毛皮製品販売の最盛期は1980年代であったとみなすことが可能である。また、遠軽毛皮の営業経歴書によれば、1973年に工場を新設、1975年に株式会社化、1979年に鉄筋5階建ての社屋新設、1982年にオイル鞣製器導入とあるが、1985年以降の記載事項はアイガモの飼育や処理に限られ、毛皮関連の記述がないことから、同社のアザラシ毛皮事業のピークは1980年代中頃までであり、そ

の後は縮小したと考えられる。これは、日本の毛皮市場の推移と同様である。日本の毛皮市場は、1970年代に小売価格で毎年200億円以上の成長を続け、1984年に小売価格で最高の推定2750億円に達し、その後は縮小し、2000年では582億円と推定されている(日本毛皮協会50年史編集委員会2001)。北海道の観光みやげ品であるアザラシ毛皮製品の販売傾向は、日本の毛皮市場全体の動きと一致していた。

なお、「北海道のおみやげ」は1985年より後は現存せず刊行されなかったようだが、北海道観光物産興社の職員によると、遠軽毛皮のアザラシ製品の販売は1995年までで、翌1996年に在庫処分をしたという。遠軽毛皮からの聞き取りでは、生産終了近くの様子はわからなかったが、同社は2002年にごく一部の商品を除いて在庫商品をすべて売り払い処分している。

アザラシ製品の販売網

日魯毛皮が製造をはじめた商品は、北海道の観光みやげ品として新たに開発されたものであり、アザラシ製品としては既存製品とはまったく異なる販路の開拓が求められた。同社の販売網は、1966年に北海道支店を小樽市に開設したことに始まる。翌1967年に札幌に移転、人員は十

数名に増加し、営業所としての体制が整えられ、名称も札幌営業所に変更された。移転直後の1967、68年頃に販売の拠点として、札幌市中心部の札幌グランドホテルと千歳空港に直営店舗を開設している。当時の営業所長によれば、観光地のなかで洞爺湖温泉と登別温泉での売上が目立っていたといい、1969年入社で観光地への営業を担当していた職員によると、観光地に販売を始めたのは1970年からで、阿寒、知床、洞爺、支笏湖、定山溪、登別、白老、函館などに納品していたという。また、札幌市内の百貨店が売り場として重要であったという。

当時は全国的な観光ブームのさなかにあり、北海道でも1970年度に来道客が100万人を越え、観光みやげ品にもヒット商品が出現した時期であった(佐藤2008)。道内観光地のみやげ品店には、キツネやミンクの襟巻き(ボア)がならば、北海道といえは毛皮のイメージも強かったらしい。この職員は1975年に転動するまでの間では、みやげ品部門の売り上げのピークは1972、73年頃と記憶している。また、商品の多くは、北海道観光物産興社が卸売り業務を代行していた。遠軽毛皮の販売方法も同様で、聞き取りによれば独自の営業方法を開拓するのではなく、北海道

観光物産興社が卸売り業務を代行し、日魯毛皮の販路を利用したものだっただけという。

なお、北海道の観光みやげ品については、「優良道産品推奨制度」という、公的試験研究機関等による品質審査に合格した道産品を推奨する制度があり、北海道や市町村、経済団体等で構成する優良道産品推奨協議会によって運営されていた。遠軽毛皮が製造していたアザラシ製品のうち、靴ベラや紳士ベルト、財布、タバコケースなどが、この制度による認定を受けた（優良道産品推奨協議会 n.d.）。時期は1971〜79年の間で、継続年度は商品により異なる。また、遠軽毛皮社長の鈴木安太郎氏は1974年に北海道産業貢献賞（知事表彰）に選ばれている（北海道新聞1974年11月26日）。これらは、アザラシ毛皮製品が、すぐれた観光みやげ品として認定されたといえるできごとであった。

5 アザラシ毛皮の輸入とその枚数

——国内産との比較

アザラシ毛皮の輸入は、旧ソビエト連邦が200海里排他的経済水域を設定した1977年以前から行われてはいた。輸入していたのは木下商事（以下、木下商事）と小林桂（以下、小林桂）、そして日魯毛皮であった（吉田1977）。このうち、小

林桂では毛皮輸入部門の担当者が1996年に他界しており、同社の輸入内容は知ることができなかったが、木下商事社長からの聞き取りができた。木下商事の社長によれば、記憶にある同社の輸入元はソビエト毛皮公団（ソユーズプシュニナ、СОЮЗПУШНИНА, SOJUZPUSHNINA）主宰のレニングラード・オークションだけという。そして、1970年以前から取り扱いがあり原皮となめし皮の両方を輸入した。なめし皮はノルウェーの G.C. Rieber & Co.（以下、リーバー社）の刻印があり同社のなめし製品と推定される。購入量や正確な年代は失念したが、遠軽毛皮に販売した。価格については1970年代以降の毛皮反対運動のために相場がかなり落ち、また、流行によっても価格が大きく変動するので、安値のときには国内産よりも安いという状況はあり得たのではないかと、また、1980年代に入ってからオークションでのアザラシ毛皮の取り扱い量が激減したというものであった。

一方、日魯毛皮については輸入アザラシ毛皮の仕切状と稟議書類が1977〜80年の4年間分が保存されている（日魯毛皮アザラシ輸入関連書類、1981年は稟議書類はあるが仕切状がなく購入内容は不明である）。これによると、同社は1977年代か

らアザラシ毛皮の輸入を行っており、内容は遠軽毛皮に向けた代行輸入であった。仲介役となったのは日魯漁業網走ミシク飼育場場長であった。輸入のための旅行は毎年1回、8〜10月にヨーロッパに向けて行なわれ、場長に遠軽毛皮の社長が毎回同行した。輸入量は、1977年2613枚、1978年5329枚、1979年5029枚、1980年6280枚、輸入相手先は毛皮ブローカーの Josef Foggenreiner & Co.（ドイツ）、GEFU（スイス）、McMillan & Moore LTD.（イギリス）、Milhnan S Allalendian（アメリカ）、Eiling Aarseth & Co.（ノルウェー）、G.C. Rieber & Co.（ノルウェー）であった（表1）。

遠軽毛皮によれば、アザラシ毛皮の輸入はほかにグリーンランドからも行なったが品質が悪くすぐに中止し、逆に最も品質がよく、要求に応じてくれたのがリーバー社で、最終的には同社からの輸入だけにしたのだという。現存する仕切状での輸入枚数の数字でも、1977年からリーバー社の占める割合が約5割と最も高く、1980年では8割以上となっている。また、各社の仕切状を比べても同社のものは等級区分が細かく区分されており、遠軽毛皮の証言を裏付けている。

輸入元	1977	1978	1979	1980
GEFU	342	1,000	1,544	529
Elling Aarseth & Co.		420		
計	2,613	5,329	5,029	6,280

表1 日魯毛皮が遠軽毛皮向けに輸入したアザラシ毛皮の会社別枚数 1977-1980年 (日魯毛皮アザラシ輸入関連書類より作成)

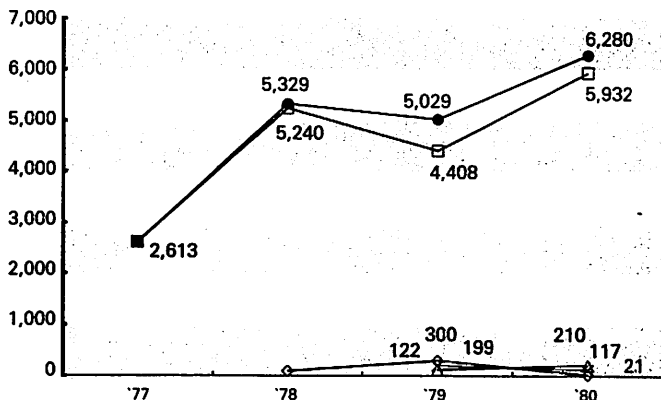


図3 日魯毛皮が遠軽毛皮向けに輸入したアザラシ毛皮の種別枚数 1977-1980年
 □タテゴトアザラシ、×ハイイロアザラシ、◇ズキンアザラシ、
 △ワモンアザラシ、●総数。(日魯毛皮アザラシ輸入関連書類より作成)

各社の仕切状に記載されたアザラシの種類は、タテゴトアザラシが大半を占め、ズキンアザラシとハイイロアザラシ、ワモンアザラシは少数見られるだけであった(図3)。

輸入毛皮の製品への利用状況をモノクロ印刷の「北海道のおみやげ」から判別すると、1979年にはじめてタテゴトアザラシ製品が現れ、1980年以降は急増している。遠軽毛皮の自社カタログでは、

6 捕獲数と国内需要頭数

捕獲数の推定

1977年版はカラー写真から判別するかぎりゴマフアザラシがほとんどで、ごく一部にクラカケアザラシと輸入品のズキンアザラシとハイイロアザラシが認められるだけだが、1998年以降のものでは、カラー写真から判別する限り、毛皮はすべてタテゴトアザラシやハイイロアザラシなどの輸入品であった。それゆえ、北海道の観光みやげ品のアザラシ毛皮製品の製造は、1970年代末以降は輸入毛皮に切り替えられたと考えられる。

農林水産省による「漁業養殖業生産統計年報」には海産哺乳類の項目があり「海獣類」が立項されている。「海獣類」が意味する動物については、農林水産省北海道統計・情報事務所網走統計情報センターによれば具体的には不明ということであるが、本欄にはイルカ類とクジラ類が別に立項されており、しかも捕鯨業は除かれていることから、「海獣類」をアザラシ科とアシカ科の両方を含む鳍脚類と仮定した。

公式統計の数値は漁業者の自己申告によるもので、正確さについては議論の余地が残る。そこで、1970年代頃のアザラシ猟業による捕獲数に関する報告を

検討し、さらに参考のため1977～80年の輸入量とも比較した。ほかに捕獲数に関する報告には、二つの毛皮工場の入荷数から推定した1968年の捕獲数で沿岸捕獲約1300～1450頭と沖合捕獲1325頭を合わせた2625～2775頭とするもの(内藤1971)、毛皮加工業者の手で加工された枚数から推測した1969～1976年の沖合捕獲のみの頭数を年間1500～1万頭とするもの(吉田1977)、紋別港根拠の1社の沖合捕獲の頭数1800頭(北海民友1971年6月28日)または2社の頭数6050頭(北海民友1975年6月17日、北海道新聞1975年6月4日)という報道などがある。「漁業養殖業生産統計年報」掲載の「海獣類」については、1968～80年の数値比較がされている(吉池1986)。以上の結果を図4に示した。

吉池は、数値は「サケ・マス定置網等に入網するもの」としている(前出)。しかし、1970～76年の数値がおおよそ1000～7000頭に昇ること、ソビエト連邦の200海里排他的経済水域が設定された1977～83年以降は100～600頭に激減していることから、この数値は沿岸での捕獲や混獲頭数だけでなく、アザラシの沖合捕獲の頭数を大きく反映し

たものと判断される。沖合捕獲は数週間の航海ごとに紋別や網走の漁港に戻り一度に大量のアザラシを陸揚げすることから、港での調査が比較的容易である。逆に沿岸での捕獲はサロマ湖や根室海峡、太平洋で行われていたが、この地域の漁業の形態の特徴として漁港を使用しないで住宅や番屋から直接出港することも多く、一度の陸揚げも少数で捕獲数の把握は困難と考えられる。磯舟を用いた個人的銃猟はさらに把握が困難であろう。このことから、この統計の「海獣類」は、主としてアザラシの沖合捕獲を反映したものと考えた。

一方、アシカ科の動物については、日本近海に分布するアシカ科3種のうち、ニホンアシカはこの当時すでに絶滅状態にあった。トドについては捕殺の大半を占める駆除は含まれないと仮定すると、この中に含まれるのはトドの混獲数でありわずかである。またオットセイは臘虎臘肭獣猟獲取締法により捕獲が禁止されているため、この統計に計上されることはない。

図4では吉田(1977)と吉池(1986)はどちらも1971年までは変化が少なく、1972年から増加し、1975年を最高に翌1976年は1974年以前の水準に下がっており、非常に似た傾向を示していた。これは遠軽毛皮によるアザラシ毛皮製

品の製造販売の開始時期が一致する。また1971年と1975年の新聞記事の捕獲頭数は、吉池の報告と近似していた。捕獲頭数1万頭に達した翌年の1976年は、換毛期の自主休漁とゴマフアザラシの選択的捕獲により4000頭に減少したが(吉田1977)、この数は同じ年の「漁業繁殖業生産統計年報」の「海獣類」とほぼ同数である。これらのことから、「漁業繁殖業生産統計年報」の数値は、沖合捕獲の陸揚げ数の傾向を示す数字としては妥当なものと考えられる。200海里規制前の1974~76年の3年間の平均捕獲数は、吉田(1977)で6666頭、吉池(1986)で5418頭であった。

逆に国内での需要を推定すると、タテゴトアザラシの年間輸入枚数は、1977年2613枚、1978年5240枚、1979年4408枚、1980年5932枚、4年間の平均は4548枚、最初の年を除いた後3年間の平均では5193枚、とピーク時の推定捕獲数1万頭の約半数である(図5)。沖合捕獲では、商品価値の低いクラカケアザラシの捕獲割合が50%(吉田1977)、時には61%(加藤1978)、全捕獲数の約40%をサンプリングした数字であるが66%(Naito and Konno 1976)など約半数前後と記録されている。聞き取りで

も、雪に覆われた流水原では太陽光の反射が強く、体つきや毛皮の模様でアザラシを見分けることは困難で、ハンターはアザラシと見ると何でも撃つてくる、という言葉があった。ゆえに、沖合捕獲では、種の選択制は高くなく、クラカケアザラシが相対的に多く分布するサハリン東方沖では、同種の捕獲が多くなったと考えられる。そのため、沖合捕獲に含まれるゴマフアザラシは50%前後になった可能性も考えられ、ピーク時の1975年に捕獲された推定1万頭のうち5000頭前後がクラカケアザラシだったのかもしれない。

以上、推定捕獲数や輸入毛皮枚数から、戦後日本のアザラシ毛皮産業の年間消費量は、利用対象種のゴマフアザラシやタテゴトアザラシにして年間約5000頭であり、この数量が1970年代中頃から1980年代中頃まで継続したと考えられた。

7 個体群への影響

アザラシは2002年の鳥獣ノ保護及び狩猟ノ適正化ニ関スル法律(鳥獣保護法)の改正(鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律平成14年7月12日法律第88号、2003年4月16日施行)により同法の対象種とされるまで、国内では捕獲を取り締まる法令は実質上存在しなかったこの改正によりアザラシ類は

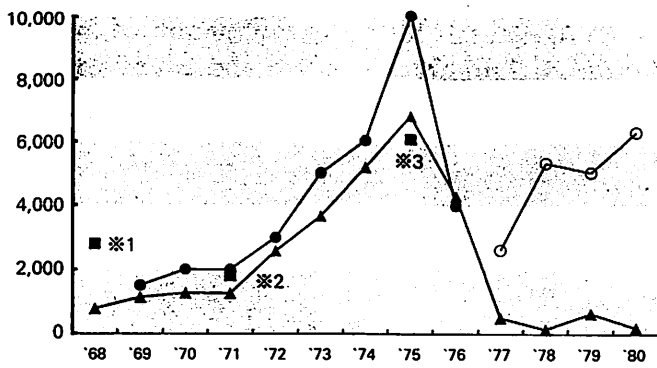


図4 北海道の業者によるアザラシ捕獲数の統計数値と推定数 1968-1980年
 ●吉田1977、▲吉池1986、
 ■その他(*1内藤 1971、*2北海民友1971.6.28、*3北海民友 1975.6.17)、
 ○日魯毛皮アザラシ輸入関連畜類による輸入総数

いは16万8千頭と見積もられていた (Fedoseev 1971)。クラカケアザラシはオホーツク海とベーリング海をあわせて18万〜20万頭 (吉田1977) というもののほか、近年の見積りでは20万頭 (1968-74年) から63万頭 (1988-90年) という (Fedoseev 2002)。また、ロシアによるオホーツク海での捕獲数は、ゴマフアザラシが1960〜80年の沖合捕獲では年間およそ2〜7000頭が捕獲され、1941〜2004年

狩猟鳥獣から外れたため狩猟はできず、同法施行後は、捕獲については原則として環境大臣または都道府県知事の許可が必要となった。
 しかしながら、日本ではゴマフアザラシやクラカケアザラシの調査は現在に至るまで不十分であり、個体群全体の資源量の推定は行われたことがない。そこで、算出の方法が具体的でなく、信頼性にも疑問はあるが、ロシアによる個体数の推定を見ると、ゴマフアザラシのオホーツク海個体群の資源量は6万頭以上 (吉田1977, Yasuda et al. 1973「海獣便覧」から作成したもの) ある

わたり数千頭から多い年には一万頭の捕獲があり、それを上回るロシア側の捕獲があった。それゆえ、オホーツク海のアザラシ資源が枯渇しなかったのは、1977年にソビエト連邦が200海里排他的経済水域を設定したことで日本側の猟業が消滅し、1991年のソビエト連邦の崩壊によりロシア側の沖合捕獲が持続できなくなったという偶然が作用しただけかもしれない。
 一方、大西洋のアザラシについては、上述のとおり、もともと多く輸入されていたタテゴトアザラシでも輸入量

の沿岸捕獲と沖合捕獲の累計で22万頭以上、クラカケアザラシは全数が沖合捕獲で1960〜80年の年間捕獲数はおおよそ2000〜1万6000頭 (1981年のみ6万2000頭)、1941〜1994年の累計43万頭に達したという (Trukhin 2005)。両種の捕獲数は1992年から目立って減少し、沖合捕獲は1994年で終わっており、ソビエト連邦の崩壊の影響のようである。
 上述のとおり、北海道周辺のアザラシについて、沿岸捕獲は資源量全体からすれば少数でありオホーツク海の個体群全体への影響はほとんど無視できるレベルと想像される。一方、沖合捕獲については、日本側だけでも1940年代から30年以上に

日本には1980年代までアザラシ産業が存在した。その成り立ちは、戦時に設立された国策会社の流れをくむ企業にあり、オホーツク海で捕獲したアザラシを、本州で毛皮製品に加工、北海道で観光みやげ品として販売するものであった。その後、道内企業のブランドで販売されるようになった。最盛期は1970年代後半から1980年代中頃までで、需要数はゴマフアザラシ5000頭分、最大捕獲数は1976年の1万頭と推定された。ソビエト連邦の200海里排他的経済水域が設定された1977年以降は、輸入毛皮を用い

は年間5000枚程度であった。同種の1971〜82年の年間捕獲数はカナダとノルウェーの合計で12万4000〜23万1000頭であり (Burch 1985)、それからすれば4.0〜2.2%と占める割合は大きくない。北海道の観光みやげ品製造による毛皮需要が、北大西洋のアザラシ個体群に大きな影響を与えたとは考えられない。
 なお、現在の北海道沿岸のアザラシの状況は、ゴマフアザラシが日本海側での来遊数を増加させており、混獲や漁業被害も報告されるようになるなど新たな動きが見られる (北海道2006)。

まとめ

参考文献

◎網走市・網走商工会議所 1958『網走商工名鑑』網走市

◎Busch, Briton Cooper. 1985. The war against the seals: a history of the North American seal fishery. McGill-Queen's University Press.

◎Fedoseev, F. A. 1971. The distribution and numbers of seal on whelping and moulting patches in the Sea of Okhotsk. In "Research on marine mammals" (Eds. K. K. Chapskii and E. S. Milchenko, 87-99. Kalinigrad. Trudy Atlant. NIRO. No.39. (in Russian), English translation, Fish and Mar. Ser. No. 3185). (直接引用できなかった)

◎Fedoseev, F. A. 2002. Ribbon seal. In "Encyclopedia of marine mammals" (Eds. W. F. Perrin, B. Würsig and J. G. M. Thewissen) pp1027-1030. Academic press.

◎北海道 2006『アザラシ類保護管理報告書』北海道

◎北海道観光物産興社 1991『三十周年記念誌 わが社の三十年』北海道観光物産興社

◎北海道観光物産興社 1966-1985『北海道のおみやげ』北海道観光物産興社

◎新北海道漁業史編さん委員会 2001『新北海道漁業史』北海道水産林務部

◎犬飼哲夫 1942『吾が北洋の海豹(アザラシ) 1、2』『植物及動物』10 (10)、37-42頁;10 (11)、41-46頁

◎伊藤徹魯・宿野部猛 1986『ゼニガタアザラシの生息数と生息状況』『ゼニガタアザラシの生態と保護』東海大学出版会、18-58頁

◎ジェファソン、トマス・A、スティーブン・レザウッド、マーク・A・ウェバー 1999『海の哺乳類FAO種同定ガイド』NTT出版

◎加藤秀弘 19『サハリン東岸および根室海峡の流水域におけるゴマフアザラシ(Phoca vitulina largha) とクラカケアザラシ(Histiophoca fasciata) の分布と食性』北海道大学水産学研究所修士論文

◎Kato, Hidehiro. 1982. Food Habits of largha seal pups in the pack ice area. Sci. Rep. Whales Res. Inst., 34, 123-136.

◎King, Judith E. 1983. Seals of the world (2nd edition). Cornell University Press.

◎川上健三 1972『戦後の国際漁業制度』大日本水産会

◎菊地慶一 1973『白いオホホツクー流水の海の記録-』創映出版

◎内藤靖彦 1971『アザラシ産業の紹介』『鯨研通信』238、49-52頁

◎Naito, Yasuhiko and Konno, Shigeyuki. 1979. The post-breeding distributions of

ice-breeding harbour seal (Phoca largha) and ribbon seal (Phoca fasciata) in the southern Sea of Okhotsk. Sci. Rep. Whales Res. Inst., 31: 105-119.

◎日本原毛皮協会 n.d.『会員名簿』

◎日本哺乳類学会編 1997『レッドデータ日本の哺乳類』文一総合出版

◎日本海洋漁業協議会 1951『一九四〇年の漁業実績 - 特別委員会報告書 -』日本海洋漁業協議会

◎日本毛皮協会50年史編纂委員会 2001『日本毛皮協会50年史 JFA 50th Anniversary』日本毛皮協会

◎日本冷蔵函館支社 1948『昭和二十三年度海豹漁業報告』日本冷蔵函館支社((独) 水産総合研究センター中央水産研究所蔵)

◎西村三郎 2003『毛皮と人間の歴史』紀伊國屋書店

◎Rice, Dale W. 1998. Marine mammals of the world: systematics and distribution. The society of Marine Mammalogy.

◎佐藤都夫 2008『観光と北海道経済』北海道大学図書刊行会

◎下山晃 2005『毛皮と皮革の文明史』ミネルヴァ書房

◎寺田弘 1997『北洋の毛皮について』『第5回環オホホツク海文化のつどい』、97-114

◎戸川幸夫 1961『知床半島 野生への旅1』新潮社

◎戸川幸夫 1966『さいはての海豹狩り』『週刊現代』5月19日号 講談社

◎Trukhin, A. M. 2005. Spotted seal. Dalnauka. (in Russian)

◎宇仁義和 2000『海獣狩猟と捕鯨』『しれとこライブラリー2知床のほ乳類』北海道新聞社、208-225

◎宇仁義和 2001『北海道沿岸の近代海獣狩猟業の統計と関連資料』『知床博物館研究報告』22、81-92頁

◎宇仁義和 2005『繰り返されたアザラシの利用 - 知床の里海文化 -』『季刊東北学』5、134-147頁

◎和田一雄・伊藤徹魯・新妻昭夫・羽山伸一・鈴木正嗣編 1986『ゼニガタアザラシの生態と保護』東海大学出版会

◎Wilke, F. 1954. Seals of northern Hokkaido. Journal of Mammalogy, 35, 218-224.

◎吉田主基 1977『日本のアザラシ産業の紹介』『遠洋』27、1-8頁

◎吉池律雄 1986『海産哺乳類保護における法的・行政的方策』『ゼニガタアザラシの生態と保護』東海大学出版会、386-396頁

◎優良道産品推奨協議会 n.d.『優良道産品推奨品名簿』優良道産品推奨協議会

た製造に切り替えられたが、1990年代始めには製造とりやめとなった。このように、オホホツク海のアザラシ個体群は、日ロ両国の商業捕獲や混獲、そのほか間接的な影響を現在まで受け続けている。アザラシの調査研究を進め、生態系の保全と管理体制を構築することは、日ロ両国の責務であると考ええる。

謝辞
本論を作成するにあたり、「はじめに」で記した多くの方々や機関にお世話になりました。なかでも、故寺田弘氏には多くのご助言をいただきました。蔵書や資料の使用を許していただきました。また、査読者の方には未熟な原稿をていねいに読んでくださり、親切なご助言をいただきました。厚くお礼申し上げます。

profile

宇仁義和……うに・よしかず
東京農業大学・嘱託准教授。北海道大学教育学部卒業、近代の資料から海生哺乳類の分布や生態の復元を行う。「独立学芸員」として博物館や自然系施設を支援中。著書に『自然ガイド知床』(北海道新聞社)、共著に『北太平洋の先住民交易と工芸』(思文閣出版)、『水と世界遺産』(小学館)など